

島で出会った石の文化……モノ言わぬ石がモノを言う

佐藤嘉信（会員）



石の文化とともに生きる人たち

瀬戸内海の島に通い、石の世界に生きる石職人、石彫作家、石彫専攻の美大生、モノ言わぬ石にモノを言わせる職人技をもつ人たちに出会った、石の文化に情熱を注ぐ人々の見聞録。

サムライウォール

2017年「アメリカ南部グラスにできたロレックス本社ビルに日本の城を彷彿させる城壁が出現した」とのニュースに石の文化に関心をもつ私はここにもスゴイ人がいると心ときめいた。

城壁を手掛けたのは古来の石積み職人・栗田純徳さん、織田信長が安土城の築城時に召し抱え、全国各地に城壁を築いてきた穴太衆と呼ばれる城壁の石積みの技

を継ぐ15代目。

設計図なしに巨石を積みあげる技をもち異国の職人に技を教えながら、100日を越える工事で見事に仕上げた。

この様子はNHKBBSのドキュメンタリーになり、「サムライウォール」を検索すると今も動画を視聴できる。

施主はテキサス州グラスにある不動産会社オーナーで、サムライに憧れる世界的な刀と甲冑コレクター、集めた兜の数は1300点に及び収集品を展示する美術館までつくった、サムライに憧れ続けている実業家。そのオーナーが新しいオフィスビルの構想を練っているときに、日本の城の石垣を積む技能集団が比叡山のふもとにいと、教えてくれたのはアメリカ西海岸に住む日本庭園の専門家だという。栗田さんは2010年カリフォ

ルニアと2014年シアトルで石積みのワークショップを開催し石積み技法をアメリカの石職人や石工に関心ある人たちに伝授している。

日本古来の石積技法伝道師、栗田さんが大切にしている穴太衆の教え「大きな石も小さい石も、それぞれに役割があり、無駄な石はない。それは社会と一緒だ」。祖父の万喜三さんがよく口にしていた言葉だという。

石は世界共通の文化

石の歴史を紐解くと石器時代にも石は境界を示すものや、狩猟の武器や石斧や石刃などの生活用具、住居として、また石碑、石像、墓標、石棺、墓石、石畳、石橋、石柱、石垣、石庭など広く使われてきた。

世界各地の石造物を見ても エジプトではピラミッド、ローマ時代の石造都市や神殿・円形劇場、イギリスのストーンヘンジの巨石、イースター島の巨石彫刻群、パルテノン神殿やエピダウロスの円形劇場、ペルーのマチュ・ピチュ、中南米ユカタン半島のマヤ・アステカ遺跡群、カンボジアのアンコール・ワット、ヨーロッパ各地の大聖堂、城砦建築などがある。

石材が豊富で乾燥地帯で寒暖の差が少ないところでは石造建築が発達した、ローマ時代より石材を装飾材としても用いることが始まり、19世紀に鉄筋コンクリートの開発とともに、石材はほとんどの場合装飾材として用いられるようになったので、近世までは彫刻家と石工の区別はなかった。

日本では石器時代に道具として発達したが、石材資源の乏しい日本は木の文化に始まっており、3世紀ごろ中国大陸や朝鮮半島から古墳文化の伝来とともに石造が入ってきたが進化せず、戦国時代に城壁の石積み技術が発達したものの建築の主流とはならず、明治に入ってヨーロッパの石造技術が導入された。

石の島人たちに会った

5年ほど前から瀬戸内海の北木島に短

期滞在を繰り返している。

ことの始まりは東京に住む友人の井手康二さんが少年期まで島で育った家が今は空き家になり、彼は外国為替スペシャリストとして大活躍してきたがリタイア後は頻繁に帰郷し、男の隠れ家よろしく釣り三昧の島暮らしを楽しんでいる。来ないかと誘われ、思ってもいなかった島暮らしを季節ごとに楽しむ機会を得た。

瀬戸内海には700余の島が点在している。笠岡諸島の一角にある北木島はJR山陽本線笠岡駅近くの波止場からフェリーで50分。本州とは14キロ離れ、島民は500人。

花崗岩でできた島、かつて127か所の採石場がある石の産地だったが今は海外の安い石に押されて、石材加工工場の多くは廃業し建物だけが残っている。最盛期には1万人の島民がいて、笠岡市の税金の3分の1は北木島からと景気も良く、映画館など娯楽施設もあってにぎわったそう。石材業にも様々な役割があり、石山所有者、採石場、石工、輸送する石船、石碑の字彫り、加工、石磨き、石工具、島民は石にかかわる仕事をしていた人が多く。石とともに生きてきた。石材加工を仕事にする人は少なくなったものの活躍している凄腕の職人は今もいる。

北木島の歴史は、徳川幕府が再築した大阪城の石垣にまでさかのぼる。大坂城は、徳川幕府が西国・北国の大名63藩64家を大動員して、元和6年（1620）から寛永6年（1629）の間に再建された。全国の大名たちは競うように巨大な石を運び、壮大な石垣を築きあげた。石には刻印と呼ばれる大名の家紋が刻まれている。このとき、島の石材も大量に使われた。明治時代には、日本銀行本店や明治生命館などの日本を代表する西洋建築が建てられ、そこには北木島の花崗岩が使われた。

悠久の時間が流れる島

信号もコンビニもなく、歩行者も見かけない静かな島。散歩すると島人は初めて会った人には「どこから来ましたか」と必ずと言っていいほど聞いている。犯罪が起きた話は聞かないが、もし事件があっても島民から情報が聞き出せるだろう、とても安全な島だ。衝動買いするような店は一軒もないので、お金を使うのは食料品だけ、無駄遣いのない島暮らしである。島民を知り島暮らしの実情を知りたく町内会にも婦人会にも顔をだして話を聞いた。顔をだすうちに、島民から

ニックネームで呼ばれる間柄になり、盆踊り、秋祭り、文化祭、介護施設訪問、草刈り、釣り、など島民と交流をし、市長とも知り合い市議会も傍聴し市職員研修も手伝うようになった。

春には島で、元禄時代から続く伝統行事の流し雛がある。旧暦3月3日の満潮時に紙雛を乗せた小舟を海に流す伝統行事で女性は毎月1体の流し雛をつくり1年分12体の雛と、前後に船頭を乗せる。これにアサリ寿司や桃の花の小枝を添えて、浜辺から海へと流す。

お盆には源平合戦で亡くなった人々を弔う、地藏の周りでゆっくりしたりリズムの盆踊り、唄い手は戦いの始めから終わりまでの情景を物語風に唄う。島では次の世代へ次の世代へと唄い継いできた。

この唄や、遣隋使、遣唐使、源平、金毘羅参り、大阪城への石船などかつて行き来した瀬戸内海航路など悠久の時の流れを感じさせる要素がたくさんある。

滞在先は今や国際ゲストハウス

島にも外国人が入り入りする、隣の白石島には外国人専用の宿泊施設もある。社交的な井手さんは日本人であれ外国人であれ、会えば「一杯飲みに来ませんか」と誘うので、男の隠れ家には珍客がよく

来る。リタイヤ後ヨットで定期的にニュージーランドから来るフェントン。アメリカから来て隣の島に住むジャーナリストのエイミー、日本文化を紹介する本、ジャパンタイムズなどのメディアに記事や寄稿文を書いている。音楽演奏や何でも屋をしながら島外から来て暮らす日本人クニさん、家族で毎春滞在するアメリカ人彫刻家のジェシー、韓国からは中学生グループが島の音楽祭に来て泊まった。井手さん宅は外国人も島民も市長や市職員も来て談笑する気軽な国際交流のゲストハウスになっている。

男の手料理で釣った魚をつまみに酒を飲み、ときには秋祭りの音頭を唄う。外国人にこの島の何が気に入ったのかと聞くと、ほとんどの人は「何もない島だからいい、古い日本がある、一杯飲みながら島民と話せるのが最も良かった」と言う。「コーヒーでもどうですか」と何度誘っても断るのはお巡りさん、「ただいま職務中です、失礼します」と。お巡りさん以外は断られたことがない。

アメリカ人彫刻家と島民は言葉の
いらぬ交流

2016年春からアメリカ人彫刻家が来るようになった。カナダとの国境に近

いアメリカ東海岸メイン州からはるばる島にやって来る。家族で2か月空き家に滞在し石彫を制作するようになった。ジェシーと妻の星野一美さんも彫刻家で子どもは島の小学校と幼稚園に通った。

シアトルから来た彫刻家もいた。石彫作家が知人のいない島に滞在する理由は「島は石の産地」「閉鎖した石材加工工場があり、工具や機械を利用できる。制作中の騒音の心配もない」「空き家が多く住むところがある」「学校もある」であった。島民が気づかなかった、弱みと想っていたことが強みであった。外国人に教えられた。

アメリカ人と島民の交流に言葉はいらなかった。石とともに生きてきた島民ばかり、石の割り方、ノミの当て方、石の磨き方、石の移動も、専門的なことも島民の誰かがその道の達人、すぐに意気投合。ジェシー家族の住むメイン州の町ステューベンも海辺で、ロブスターで有名なところ、魚やヒジキは大好物。石の文化に国境はない。

アメリカ人彫刻家と石について丁々発止のやり取りをする鳴本哲也さんに出会った。

鳴本さんは少年期に父親を石材運搬の操船中に事故で亡くすなどいくつもの苦難

を乗り越えて起業し、今や日本有数の石材加工会社のオーナー経営者、石を知り尽くした人、アメリカ人彫刻家との共通語は石。2人の議論はデザインや石質、加工法など多岐にわたり面白い。でもビジネス談議になると厳しく意見する。

鳴本さんの石材会社は中国福建省にも工場があり、石材や加工機械の仕事でイタリア、中国、韓国、南米などにも出かけて交流が広い。イタリアから導入した石材加工機械は若い中国人社員がオペレーションしているグローバル石屋さんだ。

今はしっかり者の息子さんの太郎さんに社長をバトンタッチして鳴本さんは地元商工会議所会頭として活躍している。

鳴本さんから「石の資料館をつくる、私は石に育てられた、北木島の石材文化を後世に伝えたい。島を、石材産産を、元気にしたい」と聞いた。しかも資料館創設は公的資金には頼らない。援助をもらうと、金を出すと口も出す、思うようにできない。すべて自分でやると聞いた。日頃から、モノの見方や考え方に強い信念を感じていたが、身近にスゴイがいるものだと感激した。

石の文化で「石」

その鳴本さんが陣頭指揮をとった運動

が2017年から始まった。石の島がある備讃諸島2市2町、笠岡市、丸亀市、小豆島町、土庄町が日本遺産認定制度を活用して町おこしをしようとして立ち上がったのだ。世界遺産や日本遺産に詳しい専門委員を招いてパネルディスカッションが2回開催された。イギリスの産業遺産の専門家と世界遺産専門委員のニール・コンソールからは開館したばかりの石の資料館や採石場を視察して登録の価値ありとのコメントがあった。

日本遺産とは、文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定し、地域活性化を目指す取り組み。各島の島民が相互に瀬戸内海の石の産地塩飽諸島、小豆島を訪問するツアーが開催され私も参加した。他の島の島民も北木島に訪問した。漁民は港で大漁旗を振り、井手さんは石の資料館の館内説明を買って出て大歓迎をし、運動は盛り上がった。2019年2年越しの運動が認められ日本遺産に認定された。

島に石の資料館が誕生

K's LABO (ケーズ・ラボ、通称：石の資料館) 2017年10月オープン。石の資料館、レストランカフェ、貸し自

転車、貸し海遊び用具、お土産店のある複合施設。北木島の石材関係者から詳細な取材を続け、文献や写真が集められた展示パネルで先人の足跡がわかる。かつての石材加工工場は見事に石の資料館とおしゃれな複合施設に変身した。

パネルの解説文は日英中の3か国語、英語は井手さんと私が、中国語は石材会社社員の中国人が訳した。「石材文化を後世に伝え、島を元気にしたい、石材産産の繁栄に貢献したい」「石のアーートの町にしよう」と創業者の強い意志が形になり太郎さんが館長に就任し、次々新しい企画を連打している。

グランドオープニングでは「石割り」が実演され「石切唄」も披露された。石切唄は北木島で受け継がれている作業唄、まだ手作業で石を切っていた時代、石工たちが山から石を切り出し、石を割るときに唄っていた、伝統文化として保存会が継承している。

「北木島石切唄」

浪花名物 大阪城も 北木で運んだ石
でもつ 嫁に行くなら 石屋の嫁に 右も左も
金ばかり 山が高うて あの娘が見えぬ あの娘

可愛いや山憎らしや
石屋すりゃこそ 米の飯喰うが 親は
ボロ着て麦を喰わよう
ここで唄とたら 聞こようか見よか
可愛いあの娘の膝もとへ

余談だが「K's LABO」のカフェで、ランチメニューに「せとうち鯛骨ラーメン」と名付けた笠岡ラーメンが登場した。タイの骨から取っただが特徴。スープはベースの鶏がらしようゆに、瀬戸内産のタイの骨と昆布を煮込んだしを加えた。具材は煮鶏とネギ、メンマと笠岡ラーメンの定番をそろえた。昨年、島で人気のラーメン店が閉じたのを惜しむ声を受け、瀬戸内らしさ、風味も良いタイを生かそうと考え、助言も得て仕上げた。1杯600円。1日20食限定。

アメリカへ石材調査、石の文化交流

石の資料館 K's LABO がオープンした翌日、鳴本さん、石工具を扱っていた山本英介さん、井手さん、そして私の4人でアメリカ石材調査に出発した。鳴本さんは「石は国を越えた人類共通の文化」との強い思いがあり、これまでイタリア、フランス、スペイン、東欧、中国など多くの国で石の文化芸術を見聞

したことから、アメリカ人彫刻家ジェシーのいる東海岸沿いの石材事情を調査することとした。アメリカ駐在経験を活かし私がツアーの案内役を務めた。

ニューヨーク、ニュージャージー、ボストン、ニューハンプシャー、メイン州などの石材工場、採石場、墓地、採石場跡を利用した石の公園、石工芸ギャラリー、空港・図書館の石像や石彫を視察、大学キャンパスにある石彫はハーバードとMITの教授に石彫の解説をしてもらい、ランチミーティングをした。

ジェシーの作品は両親が所有する10エーカー（約12万坪）の深い森の中の散策路沿いに展示されている。ゆっくり森を歩きながら作品を見られる、作品には値札がついており、お客様と歩きながらどんなイメージの作品を欲しいのか聞くそう。別荘に石彫を置く方も多いという、アメリカらしいスケールの大きさだ。

帰国後、石の資料館を応援するボランティア7人が研究員となり私もその一人になった。



4月2日の除幕式でジェシーは「作品は私が感じた北木島、多くの人の助けで完成できた」と挨拶、島民70人と祝った。

日本人2名、アメリカ人3名、ニュージャージーランド人1名、マレーシア人1名のメンバーで構成。

島を思うアメリカ人彫刻家の作品

アメリカ人の彫刻家ジェシーが2018年2月から1か月半かけて空き工場で作成した作品名は「Wind Swept」、彼が感じた北木島 Wind Swept「風に吹きさらされた」を意味する。

何度も訪れた北木島の印象を託した作品で、四方を海に囲まれ、自然や時代のどんな風にさらされても、遅しく明るく生きる「愛する人々と北木島」という思いが込められた作品、オブジェは、表面に風の流れを刻み込んだ1・25トンの2つの花崗岩を組み合わせており、高さ1・8メートル、幅2・5メートル、奥行き1・5メートル、石の資料館入り口付近に据えられた。

美大生を募集し石彫シンポジウムを開催

アメリカ石材調査から帰国後、石彫シンポジウム開催のプロジェクトを立ち上げる。私もそのメンバーになった。石彫シンポジウムとは石彫作家が公開で石彫作品を制作するイベントで、バブル期には全国各地で開催されたようだ。地元笠岡市では1989年から石彫シンポジウムを6回開催し、その石彫は笠岡駅前メインストリートや彫刻広場に数多く設置され、市民が石の文化を育む歴史や風土がある。しかし、北木島の石材産業が活況を失い最後のシンポジウムから20年の時を経ており当時の情報は限られていることから、美術大学やシンポジウム経験のある石彫作家を訪問し教えを乞いながら、手探りでシンポジウム開催を具体化することにした。

しかし、出来上がった作品をどのように値付けし販売するのかなどわからないことばかり。石材会社オーナーの鳴本さんはアートに造詣が深く石彫作家や画家の友人、知人がおり、展示会や美術館には足を運んでいる。鳴本さんの知人が尾道で個展をするからと言われ見に行った、人生で初めて接する石彫作家はイタリア

在住の著名人、石のアーティストに何を話してよいのやら戸惑ったものだ。こんなことから石彫シンポジウムプロジェクトは始まった。

学生募集の大学訪問はマーケティングの兼任教授をしていた私が担当し、首都圏の美大で石彫講座のある大学をリストアップし、簡単なシンポジウムの案内チラシを作成し、片っ端から飛び込み訪問した。幸いにも担当教授にお会いでき、「島に石の資料館がオープンしたこと」や「彫刻を学ぶ学生にチャンスを与えたい」と話す。素人が企画しているのと正直にお話ししたところアドバイスもいただき、武蔵野美術大学戸田裕介教授と東京造形大学井田勝己教授の推薦で5人の学生が参加してきた。

シンポジウムがスタートした、2018年夏休みの2週間、宿舎は空き家を利用、食事は自炊、テント5張り用意し各学生がテントの中で制作騒音などの心配もなく制作時間は自由、休憩は海に飛び込み気分転換してい



た。公開制作を多くの島民が見学に来た。ベテラン石工だった水野さんたちがノミの当て方や道具の使い方、石の磨き方などアドバイスした。またたくさんの方が学生に差し入れてくださるなど微笑ましい交流をよく見かけたのは石の島ならではと言える。

実行委員長の太郎さんの大活躍と学生の面倒をみた資料館の奥田さん、静ちゃん、ミッチャン、インターン生の松ちゃんたち5人の力は大きかった。多くの方に手伝っていただき有難かった。島の一大イベントとなった。

開会中に戸田教授と井田教授に遠方の島まで激励にお越しいただき作品完成に向けて一段と力が入った。石彫の作品お披露目会前には島のスピーカーを通してお披露目会の案内放送があり多くの島民が参加した。

資料館で研修中のインターン生の松ちゃんが司会、石字彫り名人の勝ちゃんが島民代表で挨拶し、石彫学生が自分の作品を解説した、若者の大活躍で高齢化が進む島民は元気をたくさんもらったと言っ

ていた。

作品テーマは「自由」とした中で、5人の美大生が石彫作品に込めたことは、石川夏帆さん……つくるときは石と自分分は距離ゼロ、島で体験したことを込めて

金子典弘さん……島で彫ることで生まれる影響と作品の変化を楽しみながら川口 祥さん……北木島で感じた人や自然のエネルギーを形に

重松慧祐さん……海の風を頬に感じ石の中に潜む熱量を表現した
中山竜輔さん……島の人々の石に対する情熱を人体の動きとして表現した
シンポジウム開催経験のない素人有志で開催したが期間中事故もなく、学生も協力いただいた島民にも満足してもらえて胸をなでおろした。私たちはシンポジウムを毎年開催しようと思気込んでいたが、美大の先生方から長続きすることが大事とアドバイスいただき2年ごとに開催することとした。

シンポジウムが終わり、学生が帰るフェリーが船着場から離れるとき、多くの島民が見送り、その中の若者が別れを惜しんで海に飛び込んだ、学生たちと島民と心の通う交流ができたのであろう。作品は今も石の資料館に展示されている。

「コロナでもできる」ことを、石彫作家のドローン展

美大生から2020年夏の石彫シンポジウム参加申し込みがあつたものの新型コロナで中止せざるをえなかった。

石彫作家や美大生に何らかの支援ができないか考えていると、戸田教授から素晴らしい提案をいただいた。

「石彫作家のドローン展をしよう」。しかし、アートの疎い私たちはドローン??ドローン??って何、から始まった。調べてみた、「ドロー」というのは、「線を引く」という意味、「ドローイング」と呼ばれる表現は普通「線描画」と訳され、鉛筆、コンテ、ペンなどで描かれた線の集積による絵画のこと。

世界には、「版画とドローイング」の国際コンペもあって、この方面の芸術活動は活発である。日本とアメリカの石彫作家や美大生から30点の作品が寄せられた。李さんら台湾からの留学生も参加した、しかし新型コロナ禍で、自分の作品が展示されているのを見られないのもつらいだろうとオンラインパーティをすることになった。11月15日太郎さんが展示作品や石の資料館、名物のラーメン、瀬戸内海の風景を映し出し、それぞれが準備した飲み物で乾杯、自己紹介があり、アメリカからジェシー一家も参加して日米が談笑を楽しんだ。

備した飲み物で乾杯、自己紹介があり、アメリカからジェシー一家も参加して日米が談笑を楽しんだ。

新型コロナで、なかなかイベントをできないが11月にはフラダンス教室の生徒さんが来てフラダンスを披露してくれた。

クリスマスにも、昨年まで毎年研究員の井手康二さんの音頭で「石の資料館クリスマスコンサート」を開催した。

倉敷にある音楽大学、くらしき作陽大学の学生さんとOBの先生が演奏や歌を披露した。

「島を元気にしたい」「石の文化を次の時代を担う若者に繋ぐ場にしたい」と鳴本哲也さんがK's LABOを創設した思いが形になり続けている。

モノ言わぬ石がモノを言う、石は国を越えた人類共通の文化、楽しい世界だ。

島民が教えてくれた島にある「哲学の道」

瀬戸内海に浮かぶ小さな島で「この島にも哲学の道がある、海を見ながらあれこれ思いめぐらすのもいいものだ」と島民から薦められた。

#1 石にこめた先人の思い

海が迫る海岸の岩山の壁に文字が刻まれた大石がある。「切り出す石ハ生きも

の「山に眠る」、初めて見たとき、これは何?ぐらいでその意味まで思い至らなかった。数えきれないほど石碑、石塔、石像、石材が島にある、滞在の都度、島民との交流が実現し、石に一生を捧げてきた石工たちにも出会った。



石を見る目も変わり、石像や石造建築などを見ると足を止め、石に託された思いを考える楽しみが多かった。

#2 巨大な石に挟まれた石像「あまのじゃく」

そうとう昔からあるらしい石像、土地の人はこれを「あまのじゃく」と呼んでいる。「あまのじゃく」とはわざと人の言にさからって、片意地を通ず者を意味するが……何を語っているのだろうか?何をねらって、石彫をつくったのだろうか?誰が命名したのだろうか?何を訴えているのだろうか



うか? 考えるだけでも面白い。

#3 海岸散歩道に積み上げられた石

海岸に積み上げられた石がある、何だろう? 廃棄石か、それにしても多い、誰の所有だろうか?

ある日謎が解けた。



三代目の石材経営者鶴田さんが教えてくれた。化学を修士まで学んだ彼は「海の塩水や風雨にさらし、石の品質検査をしているのだ」と。「海外からの安い石に對抗し、経年劣化の少ない白御影の気品」「日本品質」を売りにする青年経営者の努力が、実っているという。かつて、日本本営の勤どころは「かゆいところに手が届く」ことだ、と教えられたことを思い出した。

#4 前を向いて

高齢者が多い島、限界集落といってもいい島。その島の先人が残した教訓を誰かが託されて作った石碑がある。島民と交流しても過去を自



慢する人などいない。

川柳、茶道、謡曲、歌、尺八、ゲートボール、釣りなど、明るく元気で、限界集落などと嘆かない今を生きる、前向きな人ばかりだ。島民が毎日見ている石はやはり何かを語りかけているようだ。

#5 アメリカ「踏み石を見て何を思つか」プリマス・ロック Plymouth Rock

何かを語る石を訪ねアメリカに旅した。メイフラワー号が1620年、イギリスから102名を乗せ自由を求めて、アメリカ東海岸プリマス(ボストン郊外)に上陸し、最初に踏みしめた石。ところが、記念にと、石を削って持ち帰る人が続出し、柵で囲い保護するようになった。人は踏み石を見て何を思うのだろうか。その売店で売られてる土産のひとつがなんと乗船名簿。

